

「八陣」と「八陣の庭」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学農学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 佩刀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10146

「八陣」と「八陣の庭」

田中 佩刀

“The Eight Positions” (八陣) and the “Eight-position” Garden (八陣の庭)

HAKASHI TANAKA

“The Eight Positions” (八陣) make up the military tactics of Fūkō (風后), a strategist of ancient China. Sonshi (孫子), Goki (呉起) and Shokatsu Kōmei (諸葛孔明) all studied “The Eight Positions”. Today, it is impossible to know exactly what was meant by this phrase, but it covered both the positioning of troops and of fortifications as well as their use in tactics of expedience, etc. “The Plan for the Eight Positions” (八陣図) is believed to have been a plan for order of battle, but “The Plan for the Eight Positions” of Shokatsu Kōmei was made by arranging stones.

The Ninomaru Garden (二之丸庭園) in the Nijō Castle (二条城) of Kyōto (京都) is said by some to an “Eight-position” garden, but it is doubtful whether it was constructed with this intention.

The garden of Kishiwada Castle (岸和田城) in Kishiwada City (岸和田市), Ōsaka Prefecture (大阪府), was designed as an “Eight-position” garden and completed under the supervision of Shigemori Sanrei (重森三玲) in the autumn of 1953. In this contemporary garden, which I rate highly, we can see an important example of the “Eight-position” style.

A. 緒 言

昭和 34 年 3 月刊行の雑誌『日本庭園』第 12 号に丹羽鼎三博士の「八陣の庭——岸和田市・城内（大阪府）」と題する論稿が収められている。私が丹羽博士から頂戴した同論稿の別刷には「進呈 垂盲木聖」と大きな字で墨痕鮮かに認められている。この論稿は四百字詰め原稿用紙にして 10 枚足らずの小論文で、「八陣」という中国の故事に関するものである。

丹羽博士より此の論稿の別刷を頂いてから年久しくなり、丹羽博士も先年不慮の事故に遭われて亡られた。昨年（昭和 45 年）の夏、私は中華民国に於て 4 ヶ月の留学生活を送ったが、その間に繙いた『朱子語類』の中に、偶々朱熹が「八陣図」に触れているのを知り、丹羽博士の論稿「八陣の庭」のことを思い出したのであった。帰国後、私は同論稿を手がかりに、「八陣の庭」に就いて色々と考えて見た。そして時間を作って、本年 3 月末から 4 月初には、大阪府岸和田市を訪れ、城址の庭園を見学したり、京都の二条城の庭園などを廻って見て来たのであった。

此の私の論稿は、丹羽鼎三博士の論稿をもとにして、私自身の意見を述べて見たものである。丹羽博士の論旨が、「八陣」を論じ、結局は岸和田城址の「八陣の庭」と呼ばれる庭園の批評であるのと同じく、私の論稿も、八陣を論じ且つ八陣の庭の批評をしているのであるが、本稿を造園に関わりの有るものとして受け取って頂けるなら幸甚である。

B. 丹羽博士の見解

そこで、『日本庭園』第12号所収の「八陣の庭」と題する丹羽鼎三博士の論稿の要旨をここに紹介したいと思う。

(要旨)「八陣の庭」

岸和田城の本丸址、復元された櫓の前に新設された所謂「枯山水」の石庭を、過日観る機会を得たが、其の傍らに立つ案内の説明板に、此の石庭は「有名な諸葛孔明の八陣に則って作られた」ものであると、しるしてあるのが目についた。

作庭技術の立場から観て、此の石庭にはいろいろと批判の余地が有る様である。例えば、余り広くはない本丸址のあの場所に於て、白砂を盛った石庭を以て、あれだけの面積を占領させたことの是非や、石庭が櫓に及ぼす影響を始めとして、特に青石を選んで縁取った輪廓の、屈曲多きこせつき方、布石の按配等々、問題は幾つか有るのだが、ここでは、あの作庭の根幹を成す「諸葛孔明の八陣」とは、抑々どんなものであるか。そして、あの岸和田城本丸址に新たに作り出された石庭の布石が、果して其の「八陣に則った」ものであるのかどうかに就いて、見解を述べて見ようと思う。

魏・呉・蜀の所謂三国の時代に蜀の丞相諸葛孔明五万の軍と魏の大將軍司馬仲達四十万の軍とが、武功(今の中国陝西省乾州)の五丈原に対陣したことが有った。此の戦に於て、寡勢な蜀軍は、数倍も優勢な魏軍に対して其の備えを堅くする為、総帥孔明が「八陣」の構えを案出したと伝えられている。

かくも歴史的な大偉人諸葛孔明の「八陣」の事であるから、はっきりと其の実況が伝わっても良さそうなものであるのに、事實は此の常識を裏切って、「八陣」は、中央の本陣の周囲に天・地・風・雲・竜・虎・鳥・蛇の八陣を配したものであると云う程度の、半ば抽象的な説明が有るのみで、具体的な様相は全然知られては居ない。勿論、後世の史家・兵家・好事家等がこれに就いて書き誌し、布陣の図を描いたものまで有るが、何れも想像や推測によって作り出された、それ等学者・築城家・好事家等の「八陣」の構えであって、孔明が五丈原で実際に構えた陣形の再現であるとの証明は為されて居ない。

諸葛孔明の死後一千七百余年、日本の岸和田城本丸址に作られた「八陣の石庭」の布石と、孔明の「八陣」の構えとを、結びつけることはできない。両者の間には何の有機的關係も無いのである。あの石庭の作者も、この位の事は充分わきまえて居る筈である。作者は、「城址一合戦一防禦拠点」なる連想の下に、史に有名な孔明五丈原の「八陣」にヒントを得て、一つの石庭を作って見たのであろう。また、そうでなくてはならない筈である。それ故、岸和田城本丸址に立てられた案内板の説明が、此の点に関して行き過ぎているのだと思う。(昭和33年11月)

丹羽鼎三博士のこのような要旨の論稿に対して、岸和田城址の八陣の庭の制作者、或は他の造

園家、造園学者たちから、賛否の論が有ったものかどうか、私は寡聞にして知らない。以下の私の論述は、丹羽博士の論稿を読んだ範囲だけで執筆したものであることを、予め御諒承願って置きたい。

さて、如上の丹羽博士の所論に就いて、私の感想を二三述べて見たい。

第一に、岸和田城は建武元年（1334）以来の歴史を有しているが、この「八陣の庭」と呼ばれる庭園は、昭和 28 年 7 月に京都林泉協会々長の重森三玲氏の設計と監督とによって、本丸址に造られたものである。（天守閣は昭和 29 年 11 月に再建されている。）しかし、丹羽博士の論稿中には「石庭の作者」と有るのみで、重森氏の名前が見当たらないのは、どういう事であろうか、不審に思われるのである。

第二に、京都林泉協会編の『全国庭園ガイドブック』（昭和 41 年初版、誠文堂新光社）、日本交通公社編の『旅程と費用』（昭和 42 年改訂版、日本交通公社）、写真集『二条城』（刊行年月未詳、倉美社）などには、京都二条城の二之丸庭園が「八陣の庭」と呼ばれていたと記されている。しかし、二条城二之丸庭園の説明の立札には「八陣の庭」とあるという事については何も書いていないし、藤岡通夫著『原色日本の美術、第 12 巻』（昭和 43 年、小学館）、吉川霏著『古庭園のみかた』（昭和 43 年、第一法規）、中根金作著『京の名庭』（昭和 38 年、保育社）などにも、二之丸庭園について八陣の庭であるとは書かれていない。二条城二之丸庭園が八陣の庭であったかどうか、もし八陣の庭であったとすれば、岸和田城址の八陣の庭と較べてどうなのか、というような事に就いて丹羽博士の御見解を伺いたかったと思うが、残念なことである。

第三に、諸葛孔明の八陣の構えに就いては、抽象的な説明が有するのみで、想像や推測による八陣図などは有っても、孔明が五丈原で実際に構えた陣形の再現であるとの証明は無い、と述べておられるが、私は、戦闘に於ける陣形は必ずしも正確に図式化できるものではないし、兵法（戦術）は機密に属する内容であるから、具体的にその内容が伝わることも稀であると思うのである。又、後世の学者や築城家や好事家たちが八陣図や八陣の構えを推測したり図に描いたりしても、それは兵法の一解釈として認めていいことであって、孔明の布陣と異なっていたにせよ（孔明の布陣は知る由も無いから、異なっているかどうかとも実は分らない筈であるが）、それぞれの解釈に意義と価値とが有ると思うのである。

最後に、丹羽博士の岸和田城址庭園に対する批判は、少くとも積極的には此の庭園の価値を認めておられないと受け取れるのであるが、私が此の庭園を実地に見た結果では、此の庭園は立派な庭園だという印象を受けているのである。

以上の諸点が、丹羽博士の論稿「八陣の庭」を読んだ私の感想なのであるが、そういう感想が導き出されて来た理由について、説明を加えて見たいと思う。

C. 八 陣 図

丹羽博士の「八陣の庭」の論稿中に引用されている諸葛孔明の“八陣の構え”の故事に就いて、曾先之の編になる『十八史略』より該当の個所を、少し長いが引用して見たい。

蜀漢ノ丞相亮、又魏ヲ伐ツ。祁山ヲ囲ム。魏、司馬懿ヲシテ諸軍ヲ督シ、亮ヲ拒ガシム。懿、肯テ戦ハズ。賈詡等曰ク、公、蜀ヲ畏ルル虎ノ如シ。天下ノ笑ヒヲ奈何セント。懿、乃チ張郃ヲシテ亮ニ向ハシム。亮逆ヘ戦フ。懿ノ兵大イニ敗ル。亮、糧ノ尽ルヲ以テ軍ヲ退ク。郃、之ヲ追フ。亮ト戦ツテ、伏弩ニ中ツテ死ス。

亮、還ツテ農ヲ勸メ武ヲ講ズ。木牛流馬ヲ作ル。邸閣ヲ治メ、民ヲ息ヘ士ヲ休フ。三年ニシテ之ヲ用フ。衆十萬ヲ悉シテ、又斜谷口ヨリ魏ヲ伐ツ。進ンデ渭南ニ軍ス。魏ノ大將軍司馬懿、兵ヲ引キテ拒守ス。亮、前ニハ数々出デテ、皆運糧繼ガズ、己ノ志ヲシテ伸ビザラシメシヲ以テ、乃チ兵ヲ分ツテ屯田ス。耕ス者、渭浜居民ノ間ニ雜ル。而シテ百姓安堵ス。軍私無シ。

亮、数々懿ニ戦ヒヲ挑ム。懿出デズ。乃チ遺ルニ巾幗婦人ノ服ヲ以テス。亮ノ使者、懿ノ軍ニ至ル。懿其ノ寢食及ビ事ノ煩簡ヲ問ヒ、而シテ戎事ニ及バズ。使者曰ク、諸葛公夙ニ興キ夜ニ寝ス。罰二十以上ハ皆親カラ覽ル。噉食スル所ハ数升ニ至ラズト。懿、人ニ告ゲテ曰ク、食少ナク事煩ハシ。其レ能ク久シカラシヤト。

亮病ヒ篤シ。大星有リ。赤ウシテ芒アリ。亮ノ營中ニ墜ツ。未ダ幾ナラズシテ亮卒ス。長史楊儀、軍ヲ整ヘテ還ル。百姓奔ツテ懿ニ告グ。懿之ヲ追フ。姜維、儀ヲシテ旗ヲ反シ鼓ヲ鳴ラシ、將ニ懿ニ向ハントスル如クセシム。懿敢テ逼ラズ。百姓之ガ為ニ諺シテ曰ク、死セル諸葛、生ケル仲達ヲ走ラシムト。懿笑ツテ曰ク、吾レ能ク生ヲ料ル。死ヲ料ル能ハズト。

亮嘗テ兵法ヲ推演シテ、八陣ノ図ヲ作ル。是ニ至ツテ懿其ノ營壘ヲ案行シ、歎ジテ曰ク、天下ノ奇材ナリト。亮政ヲ為スニ私無シ。馬謖素ヨリ亮ノ知ル所ト為ル。敗軍ニ及ンデ流涕シテ之ヲ斬ル。而シテ其ノ後ヲ郵ム。李平、廖立、皆亮ノ廢スル所ト為ル。亮ノ喪ヲ聞クニ及ンデ、皆歎息シテ涕ヲ流シ、卒ニ病ヒヲ發シテ死スルニ至ル。

(原文は漢文。段落は筆者が切った。)

以上の文を史実を伝えるものと仮定して検討すると、先ず、諸葛孔明と司馬仲達との対陣の際に、孔明が八陣の構えによる布陣をしたという記事は『十八史略』には見当たらないのである。次に、「亮嘗テ兵法ヲ推演シテ、八陣ノ図ヲ作ル。」というのは、この対陣よりも前にあったことであり、「是ニ至ツテ懿其ノ營壘ヲ案行シ」というのは、孔明の死後にあった事なのである。従って『十八史略』の記事では、考え様によっては、「八陣ノ図」と「其ノ營壘」とは結びつかない、とも解し得るのである。

『十八史略』の上の文に見える「八陣ノ図」に就いて、陳殷は次のように註している。

興元府西県定軍山下ニ在リ。筌蹄ニ云フ、石ヲ聚メテ之ヲ為リ、天地風雲ヲ以テ四正ト為シ、竜虎鳥蛇ヲ四奇ト為ス。

(原文は漢文)

この註の地名を諸橋轍次著『大漢和辞典』(全 13 巻, 昭和 30—35 年, 大修館書店)で調べて見ると、興元府は陝西省鄭県の府名、定軍山は陝西省沔県の東南にある山で、諸葛孔明を葬った山だと説明している。

陳殷の註に見える「筌蹄」は手引き案内書の類を意味するが、具体的にどういう書を指しているのか、現在までの調査では未詳である。又、陳殷が八陣図が石をあつめて作ったものであるとしている点には注意すべきであろう。

D. 辞典の説明

中華民国に於て 50 年余りに刊行された『辞源』(商務印書館)は上編・下編・続編の 3 冊から成っていて、内容も正確で良いものであったが、一昨年(昭和 44 年)に台湾商務印書館から 3 冊を大判の 1 冊にまとめたものが刊行され、更に昨年 2 月にその改訂増補版の『辞源』全 1 冊が刊行された。台北で私はそれを求めて以来、常用しているのであるが、いま同書の「八陣」の説明(163 頁)をここに引用しよう。

【八陣】〔雑兵書〕八陣ハ、一ニ方陣ト曰ヒ、二ニ円陣ト曰ヒ、三ニ牝陣ト曰ヒ、四ニ牡陣ト曰ヒ、五ニ衝陣ト曰ヒ、六ニ輪陣ト曰ヒ、七ニ浮沮陣ト曰ヒ、八ニ雁行陣ト曰フ。

〔李靖問対〕太宗曰ク、天地風雲竜虎鳥蛇、斯ノ八陣ハ何ノ義ゾヤ、ト。靖曰ク、古人此ノ法ヲ秘藏ス。故ニ詭リテ八ノ名ヲ説ケリ。八陣ニ於ケル、本ハ一ナリ、ト。(原文は漢文)以上が改訂増補版の『辞源』に於ける「八陣」の説明であるが、「八陣図」に就いては次の如き説明(165 頁)が有る。

【八陣図】漢ノ諸葛亮、兵法ヲ推演シテ、八陣図ヲ作ル。

〔寰宇記〕「夔州奉節県ハ、モト漢ノ魚復県ナリ。八陣図ハ県ノ西南七里ニ在リ。細石ヲ聚メテ之ヲ為ル。各々高サ五尺、広サ十畝、凡ソ六十四聚ナリ。」

又、陝西ノ沔県ノ定軍山下ニモマタ八陣図ノ遺迹有リ。

極めて簡潔にして要を得た説明である。但し引用書の『雑兵書』は孫子の兵法に関する書であるが、内容その他は現在までの調査では未詳である。『李靖問対』も内容は未調査であるが、李靖は唐、三原の人で字は薬師、諡は景武で、太宗の重臣で兵法に長じた人であった。『太平寰宇記』は宋の楽史の撰になる 193 巻の地誌である。

「八陣」の説明中の李靖の言葉は、古えの人は此の兵法を秘藏していたので、人々の目を欺くために八つの名の陣を挙げているが、八陣というものは元来は一つの陣(戦術)なのだ、と言う意味であると思う。

「八陣」及び「八陣図」に就いての説明が最も詳しいのは、諸橋轍次著『大漢和辞典・巻二』（昭和31年、大修館）17頁の説明であって、さながら小論文の如き感が有る。詳しい説明であるから、引用などに内容の重複する所が有るが、その要点をここに抄録したいと思う。

【八陣】軍陣の八つの形式。①太古のもの。金・土・水・火・木・地・人・天。②風後の作。天・地・風・雲・虎翼・蛇蟠・飛竜・鳥翔。〔羣書拾唾〕八陣ハ、風后ノ制スル所ノ戦法ナリ。八陣ハ左右前後中心ニ布キ、零リハ大将之ヲ握ル。故ニ握奇ト曰ヒ、又握機ト曰フ。下略。（引用文の原文は漢文。以下同じ。）③孫子の作。方・円・牝・牡・衝（衝方）・罍置・輪（車輪）・雁行。④呉起の作。車箱・車軒（車輪）・曲（曲二）・鋭・直・衝・卦（掛）・鵝鶴（一に駢鶴に作る）。⑤諸葛亮の作。洞当・中黄・竜騰・鳥飛・折衝・衝（連衝）・握機（握奇）。⑥大江維時が唐から伝えた陣形。魚鱗・鶴翼・雁行・彎月・鋒矢・衝軛・長蛇・方円。

細かい論は後廻しにして、八陣図についての説明を次に抄録する。

【八陣図】①諸葛亮の作った八陣の図形。其の遺跡については数説が有る。①陝西省沔県の東南。〔水経、江水注〕定軍山ノ東ヲ高平ト名ヅク。是レ亮ノ宿營セン処ニシテ、營ノ東ハ即チ八陣ノ図ナリ。〔漢中府志〕八陣図ノ八陣ハ、細石ヲ聚メテ之ヲ為ル。各々六十四聚、又二十四聚有リ。兩層ヲ作ル。每層各々十二聚。其ノ跡尚シク存ス。

②四川省奉節県の南。〔水経、江水注〕江水、又東ノカタ諸葛亮ノ図壘ノ南ニ逕ル。石磧平曠、兼ネテ川陸ヲ望ム。亮ノ造ル所ノ八陣図有リ。〔太平寰宇記〕八陣ノ図ハ、奉節県ノ西南七里ニ在リ。周辺ハ四百八十丈、中ニ諸葛孔明ノ八陣図有リ。石ヲ聚メテ之ヲ為ル。各々高サ五尺、広サ十畝、歴然トシテ基布シ、縦横ニ相ヒ当ル。中間相ヒ去ルコト九尺、正中間、南北ノ巷、悉ク広サ五尺、凡ソ六十四聚、或ハ人ノ為ニ散乱シ、及ニ夏水ノ没スル所ト為ルモ、冬水退キ後ハ、依然トシテ故ノ如シ。

③四川省新都県。

②八卦の方位に因って設けた陣形。中央に天衝・地軸があり、前後左右に衝があり、四隅に風雲があり、後に遊兵の陣のあるもの。〔凶書編、八陣図総叙〕前略。八陣ハ、八卦ヲ象リテ以テ位ヲ定メ、井地ニ因ッテ形ヲ制ス。兵ノ紀律ナリ。武侯ノ推演ハ、其ノ妙ヲ得タリ。司馬懿ノ甘ジテ辱メヲ受ケテ敢テ輕出セザル所以ナリ。今ヨリ之ヲ見ルニ、天ニ衝有リ、地ニ軸有リ、前後左右ニ衝有リ、風雲ノ四隅ニ列スルハ、八陣ノ定位ナリ。卻月ノ衝ヲ後ニ環ラスハ、八陣ニ応ジテ之ガ羽翼ヲ為ス所以ナリ。中略。敵ニ因ッテ陣ヲ變ジ、形ハ方ニ由ッテ遷シ、遊ハ以テ擁衛シ、正ハ以テ送出スルハ、奇正ノ用ナリ。奇正ノ相ヒ生ズル、端倪シテ測ルコトナク、小大ハ衆ニ視、進退ハ敵ニ因ル。之ヲ散ズルニ経有リ、之ヲ聯スルニ一ノ如シ。下略。

上の説明の文中の「卻月」とは半月の陣形と想像される。以上は『大漢和辞典』の説明である。

E. 朱子語類

緒言に述べたように、宋の朱熹の『朱子語類』には、諸葛孔明や八陣図に関する記事が見える。いま手許には『朱子語類』が無いので、張伯行の編纂した『朱子語類輯略』（人人文庫，台湾商務印書館，1969年）から引用するが、同書巻八の「歴代」の中に「八陣図法」について次の如き記事が見える。

（前略）今ノ戦ヒハ、タダ前列ニ^よ靠リテ、後面ノ人ハ更ニカヲ著クルコトヲ得ズ。前列勝タバ則チ勝チ、前列敗ルレバ則チ敗ル。八陣ノ法ノ如キハ、毎軍、皆用フル処有り。天衝、地軸、竜飛、虎翼、蛇、鳥、風、雲ノ類ヲ、各々一陣ト為ス。戦闘ニ専ラナル者有り、衝突ニ専ラナル者有り、又、之ヲ^{てんぜつ}纏繞スル者有り、然ルニ未ダ如何ニ之ヲ用フルカヲ知ラズ。

（中略）八陣ノ図ノ^{てい}若キハ、古ヘヨリ之レ有り。周官ニ謂ハヌル戦ヒノ^{ちん}陳ノ如キハ、蓋シ是レ此ノ法ナリ。握奇ハ、文、未ダ必ズシモ風后ノ作ル所ナラズト雖モ、然シテ由来ハ須ラク遠ナルベシ。

武侯ノ石ヲ江辺ニ立ツルハ、乃チ是レ水ノ回状スル処ニシテ、水ノ漂蕩スル能ハザル所以ナリ。其レ地ノ善ヲ^{かく}扱ビテ基ヲ之ニ立ツレバ、堅、此ノ如シ。此レ其ノ善ク兵ヲ用フル所以ナリ。（下略）（原文は漢文）

また、朱熹は季通の八陣図説その他に就いても言及している。季通は蔡元定^{あぎな}の字であって、臧勵蘇その他の人々の編纂した『中国人名大辞典』（1966年，台湾商務印書館）には次の如く記されている。

蔡元定（宋）発ノ子。字ハ季通。幼ニシテ庭訓ヲ承ケ、長ジテ朱熹ニ從ッテ游ブ。熹、其ノ学ヲ^た扣キテ、大イニ驚キテ曰ク、此レハ吾ガ老友ナリ。弟子ノ列ニ在ルニ当ラズ、ト。遂ニ^{とも}与ニ^{たふ}対榻シテ経義ヲ論ジ、毎ニ夜分ニ至レリ。四方、学者ヲ求ムルニ、必ず先ヅ元定ニ從ッテ質正セシム。韓侂胄ノ偽学ノ禁ヲ興スヤ、道州ニ謫セラレ、^{しやう}春陵ニ至ル。遠近ヨリ来ル学者、日ニ^{おほ}衆シ。書ヲ^{おく}賂リ諸子ヲ^{いまし}訓メテ曰ク、独リ行キテ影ニ愧ヂズ、独リ寝テ^し衾ニ愧ヂズ。吾ノ罪ヲ得タル故ヲ以テ遂ニ^{おこた}解ルコト勿レ、ト。卒セシ後、文節ト追諡ス。律呂新書、八陣図説、洪範解、太衍詳説、燕楽原弁、皇極経世、太玄潜虚指要、有り。嘗テ西山ノ絶頂ニ^{うま}登リ、饑ヲ忍ビテ書ヲ読ム。学ブ者、西山先生ト称ス。（原文は漢文）

季通すなわち蔡元定の父親の蔡発も博覧強記の学者であり、また子供の教育に熱心な人であったらしい。又、朱熹は蔡元定を門人としてではなく、友人として遇したということであるから、季通は相当な学者であったと思われる。そして朱熹が諸葛孔明や八陣に関する事について述べるのも、或は季通が身近かにいた其の影響かも知れないのである。そこで更に『朱子語類輯略』の巻八から、八陣に関する記事を抄録しよう。

或ルヒト問フ、季通ノ八陣図説ハ、其ノ間ニ著ス所ノ^{ちん}陳法ハ、是カ否カ、ト。曰ク、皆是

レ元来有ル^{もの}底ナリ。但シ季通、許多ノ方円ノ陳法ヲ分開シテ、相ヒ混雜セザルハ、稍々好シ。

又問フ、史記ニ書ク所ノ高祖ノ垓下ノ戦ヒハ、季通以テ正ニ八陣ノ法ニ合スト為セリ、ト。曰ク、此レモマタ後人ノ好奇ノ論ナリ。大凡兵有ラバ須ラク陣有ルベシ。(中略)

今人、タダ史記ニ書ク所ノ甚ダシク詳カニシテ、漢書ハ則チ之ヲ略セルヲ見テ、^{すなは}便チ司馬遷ハ兵法ニ^{せと}暁シト為シ、班固ハ暁カラズト為ス。此レ皆好奇ノ論ニシテ、班固ノ以テ行陣ハ乃チ用兵ノ常ナリト為シテ、故ニ之ヲ略シテ、省文ニ從ヒシノミナルヲ知ラザルナリ。(下略)(原文は漢文)

朱熹の「八陣」の解釈は、謂わば戦術として、即ち戦闘に於ける各軍団の機能として「八陣」を考えていたようである。「八陣の図」に就いては軍陣の布置図と解しているらしく、また武侯(諸葛孔明)の八陣図に就いても言及している。そして朱熹がこのように「八陣の法」や「八陣の図」に関心が有ったことは、宋学研究が盛んになった1400年前後の日本の五山禅林では知られていたであろうし、その事は大江維時(応和三年963歿)の「八陣」とは別に、「八陣」が教養知識人たちの間に知られていた可能性が有ることを推定させるものである。

F. 戦術か陣地か

「八陣」が、変幻自在な戦術なのか、或は固定的な構築された陣地なのか、或は軍団の配備なのか、要塞の配置なのか、このような「八陣」の性格に就いては明確にできない点がある。一つには、「陣」という語そのものの持つ意味が複雑であることも、「八陣」の解釈を多岐にしているのである。

「陣」の字義を諸橋轍次著『大漢和辞典・卷十一』によって調べて見ると、①つら、ならび、隊伍、軍隊の行列。②そなえ、布兵、③たむろ、屯営。④いくさ、兵法、戦争。⑤陣どる。⑥文章を以て意見を戦わせること。⑦鳥の群。⑧物のさま。⑨「陳」の俗字。となっている。この中で、「陣」が「陳」の俗字であるというのは、もと「陳」は「^{ちん}陳」に通じて「つらねる」という意味に用いていたのであるが、後に軍陣の意味の時には陳に代って「陣」を用いるようになった事情を指すのである。

上に記した「陣」の字義を見ても分る通り、その内容は複雑であって、軍隊そのもの、戦闘隊形、陣地構築、戦闘、軍団配備、等の意味を包含している。もとより兵法(戦術)というものにそれぞれが結びついているものである事は論を俟たない。

また「陣図」の説明を『大漢和辞典』で見ると、軍陣の敷き方を描いた図であるとして、次の文を引用している。

〔事物紀原、戦陳攻守部、陣図〕 呉子ノ序ニ曰ク、諸葛孔明ノ天地・風雲・竜虎・蛇鳥ハ、本一陣ナリ。黄帝兵井ノ法ニ出ヅ。魚復ノ沙上ニ於テ、石ヲ^{かさ}累ネテ八行ヲ陣ト為ス。世ニ八陣ノ列ト謂フナリ。晋の桓温、之ヲ見テ曰ク、此レ常山ノ蛇ノ勢ヒナリ。後人ノ陣図ヲ為ス

者ハ此レニ從フ。(原文は漢文)

この記事から諸葛孔明の作った「八陣図」は、軍陣の敷き方をあらわした模型で、孔明はそれを石で造ったことが分る。但し、八陣の具体的な布陣を知ることはできず、僅かに八行という点に、易の八卦（乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤）との関聯を想像せしめられるに止まる。

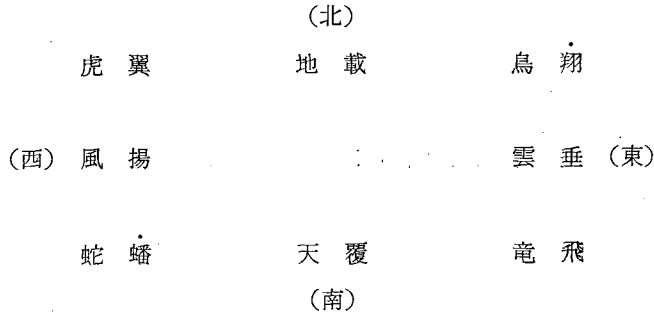
『大漢和辞典』に引用されている『太平寰宇記』の記事（本稿D参照）に拠れば、奉節県の西南七里の地点に在る八陣図は、周廻が480丈（1丈は2m強）の中に孔明の八陣図が有って、高さは5尺（1尺は22cm強）、広さ10畝（1畝は^{まじわたり}径なら1尺の^{まわり}こと、環ならば8尺のこと）であると記しているから、孔明の八陣図の規模は或る程度まで想像できるのである。又、『漢中府志』には細石を^{あつ}めて之を^{つく}ったとあるから、その材料が石であったことが知られる。そして64聚と24聚と有って、両層を作っており、毎層は12聚である、と述べられている。この「聚」の意味はハッキリ分らないが、恐らくは一群の細石、つまり石組の一かたまり（mass）を意味するものではないかと想像される。

孔明の八陣図とは別に、八卦の方位によって設けた陣形である八陣図も有るとされるが、これも『図書編』の記事から知ることができるよう、諸葛孔明の八陣図と無関係ではない。『大漢和辞典』には『図書編』から採った八陣図の挿図がある。この図はそれぞれの陣を○印で示していて、その○印の数は天衝その他の合計が64個、遊兵二十四陣の合計が24個で、『漢中府志』の記事中の64聚、24聚、両層などの数字にはうまく適合しているのである。そして、風雲と天衝の組合せが4組（4陣）、地軸と天後衝と地前衝の組合せが2組（2陣）、地軸と天後衝と地後衝の組合せが2組（2陣）、計8組で8陣となっている。又、遊兵二十四陣は○印3個宛の組合せが8組で8陣となっている。この『図書編』の八陣図は、易の八卦の方位にもとづいてと謂われるが、八陣の一解釈としては認め得るものの、朱熹が「天衝・地軸・竜飛・虎翼・蛇・鳥・風・雲の各々を一陣となす」としているような見地に立てば、聊か釈然とし得ない図であると思う。

『漢中府志』の数字を私は次のように解し得ると考える。それは易の陽爻☰と陰爻☷とを3個ずつ組み合わせて、乾☰、兌☱、離☲、震☳、巽☴、坎☵、艮☶、坤☷の八卦を生むのであるが、これを二つずつ組合せると（例えば、坤の下に乾を組合せると「泰」という卦になる）、64種類の卦ができるのである。又、八卦の陽爻と陰爻の数は8×3（陽爻と陰爻との組み合わせ）で24個である。又、八卦を陽卦（乾・震・坎・艮）と陰卦（坤・兌・離・巽）の2組に分けると、陽爻と陰爻とは各々12個ということになる。更に、例えば乾を基本とする卦は8通り有るのだが、八陣の各1陣が八卦のそれぞれ1卦（乾・震・坎……）を示しているとすれば、やはり8卦×8通りで64通りという数字が出て来る。従って此のような見解からすれば「八卦方位図」のようなものが八陣の布陣法だと考えられるのである。

次に、易を離れて八陣の図を考えて見ると如何なるであろうか。『図書編』には、天覆南に出

で、地載北に出で、雲垂東に変じ、風揚西に変ず、東南の変は竜飛となり、西北の変は虎翼と為る。蛇は西南に蟠り、鳥は東北に翔る、とあるが、此れは『小学紺珠』に引用されている、風後の作と謂われる握機（握奇経）の文、天・地・風・雲・虎翼・蛇蟠・飛竜・鳥翔と呼ぶ八陣と関聯している。そこで『図書編』に見える八陣図とは別に、同書の記事をもとに八陣を図示して見よう。



『太平寰宇記』の八陣国の説明中に、歴然として碁布し、縦横に相ひ当る、と書かれている。碁布とは、碁石を列ねたように並ぶことであって、必ずしも方形を意味しないが、語感としては、碁盤上の碁石を聯想するので、やはり方形の布陣のように感じられるのである。又、『十八史略』の陳殷の註に、天地風雲を四正とし、竜虎鳥蛇を四奇となす、とあるが、この図によって、四正とは東西南北に配置された陣であり、四奇とは東北・東南・西南・西北に配置された陣であることが分る。更に、名称が類似するという点から考えると、朱熹の言う天衝・地軸・竜飛・虎翼・蛇・鳥・風・雲の八陣も如上の図の如き八陣であったかも知れない。諸葛孔明の八陣図の名称は、洞当・中黄・竜騰・鳥飛・虎翼・折衝・衝（連衝）・握機（握奇）であって如上の『図書編』の八陣の名称とはかなり異なっている。しかし、諸葛孔明の八陣も、孫子の八陣も、少しずつ名称が共通する点を考えて見ると、風後の八陣の変化した形としての八陣であると想像される。

そこで諸葛孔明の八陣図を『漢中府志』や『太平寰宇記』の記事をもとにして想像すると、上図の如き形の軍陣配置図を、石を材料とした模型によって示したものと推測できると思う。先に引用した『事物紀原』の「石ヲ累ネテ八行ヲ陣ト為ス」よりも、少し具体的な想像になると思う。

しかし結局は、風後の八陣、孫子（孫武）、呉起、諸葛孔明等の八陣の内容を明確に突き止めることは困難である。例えば、諸葛孔明の八陣図（八陣の模型）は何を示しているのであろうか。その布陣のさまは何を象徴しているのであろうか。

『朱子語類輯略』に見える朱熹の解釈では、八陣の各々は、「戦闘に専らなる者有り、衝突に専らなる者有り、又、之を纏繞てんぎょうする者有り」ということであるから、戦闘隊形（軍団の配備）を考

えたものであって、固定した要塞や謂わゆる基地などの構築・建設は指していないようである。又、『李靖問対』で李靖が「詭りて八の名を説けり、八陣に於ける、本は一なり」と言っているのも、変幻自在の戦術を意味していると思われ、更に『図書編』に奇正の用として、「敵によって陣を変じ、形は方によって遷す」と記されているのも、実際の戦闘行動を指している。

然るに一方では、八陣の法の推演による八陣の図の遺跡が伝えられていることは、孔明が模型を作ったとも、実際の堡壘を構築したとも考えられ、八陣が戦術に基づく陣地構築法であったという推定の可能性を残しているのである。即ち戦略的に価値の有る地勢を利用した陣営の構成法であったかも知れないのである。

私は八陣を戦術と解し、八陣図はその戦術を応用した軍団配備の模型であると考えているのであるが、そう断定すべき材料は揃っていないと言わざるを得ない。ただ、孔明の八陣図について丹羽鼎三博士が、「総帥孔明が八陣の構えを案出したと伝えられている」とされている点は、「案出」ではなく「推演」であるとしなければならないと思う。即ち諸葛孔明も風後の発明した八陣を自己の見解によって解釈した一人だったのである。始めに述べたように（本稿B参照）、孔明の陣形そのものの再現は現在の段階では不可能であるが、私は「八陣」或は「八陣図」について、孔明がしたのと同じように後人が解釈を下すことには、其の意義を認めたいと思う。資料を蒐集し駆使し多くの説が立てられる中で、いつか其の本源が突き止められるだろうと考えるからである。

ここに一言付け加えて置くが、大江維時（従三位中納言、応和3年 963 歿、76 歳）が唐から伝えたと言う魚鱗・鶴翼以下の八陣の陣形（本稿D参照）が有るが、この事は日本にかなり古くから「八陣」が知られていたことを推測させるものである。

橘俊綱の『作庭記』の中に、「石のこはんにしたかひて」等と有るが、古くは此れを「石の碁盤に従ひて」と誤って読んでいた由で、田中正大氏は、「石の乞はんに従ひて」と読むべきだと論じておられる（田中正大著『日本の庭園』、昭和42年、鹿島研究所出版会）。『日本の庭園』に拠れば、室町時代の『嵯峨流庭古法秘伝之書』に、碁盤目の庭園図面が有る由で、そんな事が乞はんを碁盤と読み誤った一因ではないか、と田中正大氏は記しておられる。

日本の兵法研究の歴史については、私はまだ調査していないのであるが、例えば『太平寰宇記』の、石を聚めて作る、歴然として碁布している、等ということが、大江維時の八陣の兵法と共に、造園家の知識の中に輸入されていたとすれば、造園家の脳裡で作庭に於ける石の扱い方に石の碁盤状の布置が結びつく可能性は有ったと思うのである。それが碁盤目の庭園図面を生む一因であったかも知れない。

G. 二条城の庭園

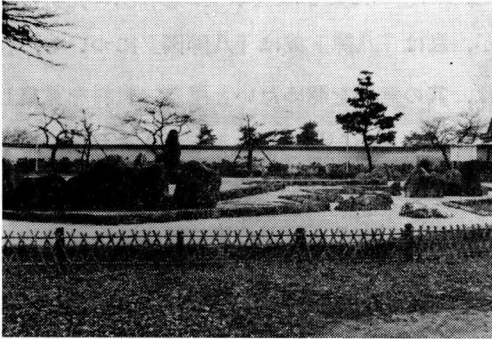
本稿Bに於て触れたように、京都の二条城の旧二之丸庭園（以下「二の丸庭園」と呼ぶ）は、八陣の庭と呼ばれていた、と記してある本が二三有る。



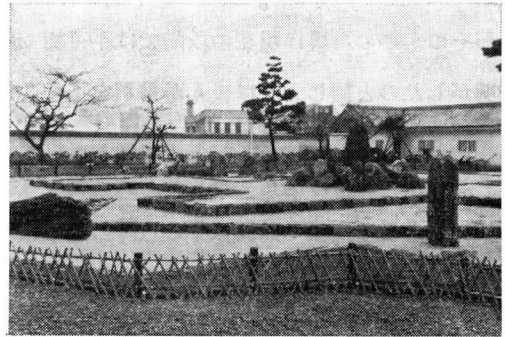
No. 1 二の丸庭園(二条城)



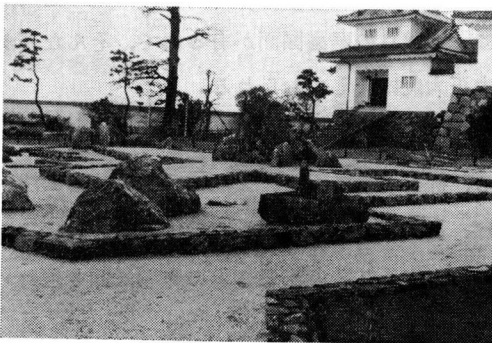
No. 2 岸和田城天守閣



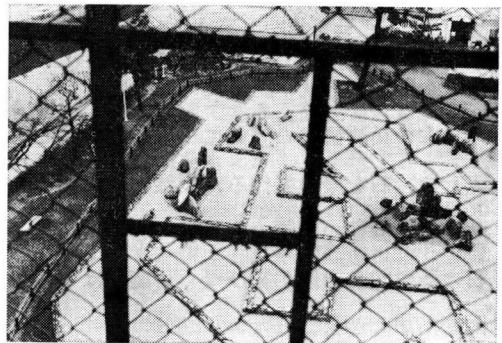
No. 3 八陣の庭(その1)



No. 4 八陣の庭(その2)



No. 5 天守閣入り口



No. 6 天守閣より

何を根拠として八陣の庭と呼ばれていたのかは、手もとの本では不明であるし、まだ調査もしていないが、京都林泉協会編の『全国庭園ガイドブック』の説明、日本交通公社編の『旅程と費用』の説明、倉美社の写真集『二条城』の説明では、二の丸庭園を八陣の庭として取り扱って

ることは既に述べた通りである。

そこで二の丸庭園の立札の説明の概略を先ず写して置こう。立札に拠ると、この庭園は池を中心とした庭であって、三つの中島に四つの橋が架けられ、西北隅に滝を落とし、池汀池辺に多くの岩石を置いている。この庭は大広間の西、黒書院の南に位置しており、大広間から鑑賞するようになっている。寛永3年後水尾天皇行幸の際、行幸御殿が庭園の南に設けられた為に、南からの鑑賞も考えて、庭園南部の石組に改変の跡が有る。(慶長七、八年頃の作庭後、後水尾天皇行幸の際に改修している。)書院造り建築に伴う庭園である。以上の旨を記している。

吉川需氏の『古庭園のみかた』(第一法規出版)の246頁には、昭和28年3月に二の丸庭園が特別名勝に指定された際の「指定説明」が記されているので引用する。

寛永三年後水尾天皇二条城行幸ノ際ニ於ケル行幸殿ニ対セシ庭園ニシテ、其後行幸殿ハ取毀タレ現在ハ大広間ヨリ鑑賞セラル 池ハ変化ニ富メル曲汀ヲ有シ中ニ三箇ノ中島ヲ置キ自然石ノ四橋ヲ架ケ西北隅ニ三段ノ滝ヲ落シ池汀池辺ニ多ク石ヲ組ム 庭園ノ西部ニまつ・かや・くろがねもち・あらかし・しひ・とべら・むく・さくら・もみぢ等ノ樹林アリテ背景ヲナシ南部ハ広キ芝生ニシテ多数ノまつヲ点綴ス 園内ノ石組ニハ通ジテ豪宕ノ趣アリ 城郭ノ築山泉水庭トシテ優秀ナルモノナリ

この指定説明の文にも八陣の庭ということには触れていないが、二の丸庭園の特色については要領良く述べられている。

藤岡通夫博士の『原色日本の美術』第12巻(小学館、昭和43年)の72頁の説明には、「風流大名小堀遠州の作として著名な庭園で巨大な石組が汀の変化をみせ、回遊式庭園となっている」とあり、また67頁には、「書院群は雁行型に各建物を配置してある。広大な庭園をどこからでも観賞できる構想にもとづいている。」と述べられている。藤岡博士のこの書にも、八陣の庭とは書かれていないが、「どこからでも観賞できる構想」というのは八陣の兵法に通ずるものが有るかも知れない。

古文化協会編『二条城』(倉美社)は簡潔ではあるが行き届いた解説書である。この書にも八陣の庭については書かれていないが、二の丸庭園の作者に就いて「一般に小堀遠州の作であると言われるが、それは詳かではない。」と指摘している点は注意していい。

二の丸庭園が八陣の庭であるということについて、少しでも具体的な記述の有るのは、先にも一部分を引用したが倉美社編の写真集『二条城』の解説である。そこでその全文を引用して見たい。

二の丸庭園 寛永3年(1626)後水尾天皇の行幸に際して創建当時の庭を一部改修したものの。池泉は廻遊式、型は対陣の構えでその陣立が八陣の法によると伝えられる。池の中央に蓬萊島、左右の二つを鶴島・亀島という。池泉周囲の豪華な石組の手法は、桃山期から江戸初期への特徴をよく示している。作者は小堀遠州と伝えられる。

「対陣の構え」の内容はどのような事なのか分らないが、その陣立が八陣の法に拠っているということであるから、この庭園がもし八陣の庭と呼ばれていたとすれば、その陣立の事が八陣の庭と呼ばれた理由になるであろう。

さて、二の丸庭園（写真1参照）の実際を見ると、二条城の唐門を入れて左手に進み、小さな門を入ればそこに庭園が展けている。廻遊式とは言うものの、現在では左手の方には進めないし、池の背後つまり西側の方にも廻ることはできず、小さな門を入れて右手に進み、池の東岸から北岸へ、即ち大広間の前を遠く黒書院の南側の方へ、池の半分程度の観覧しか許されていない状況である。

この二の丸庭園は面積が4815坪も有る由であるが、それほど広々とした感じが無いのは、かなり屈曲して複雑な池の汀の線と、それに沿って配置された数多い石のためであろうと考えられる。どの解説を見ても、この石組については豪宕とか豪華とかいって批評がなされているが、それがとりもなおさず此の庭園の特色となっているのである。

二の丸庭園が八陣の庭として作庭されたものかどうかは、現在の段階では未調査なので言及を避けたいが、この庭園が八陣と結びつけられる可能性を有する理由は幾つか推測することができるのである。それは一つは、藤岡通夫博士が述べておられるように、二の丸の書院群は雁行しているのであるが、私の見る所ではその書院群に対して、ちょうど対抗するような形で二の丸庭園が布置されているのである。この雁行ということは、孫子の『雑兵書』の八陣図の雁行陣を聯想させるものであり、又、大江維時が唐から伝えたという八陣の一つにも雁行陣が有るのである。いま一つは、池の中央と蓬萊島と左右の鶴島・亀島という配置が布陣を聯想させ、大江維時の八陣の魚鱗・鶴翼という名称も、聯想を刺戟したかも知れないのである。そして、数の極めて多い石の配置は諸葛孔明が兵法を推演して作った八陣図との聯想を生んだかも知れない。

私が見た所では、二の丸庭園が八陣の庭であるというような強い根拠は感じられなかった。二の丸書院の豪壮な建物に対しては、それほど大きいとも見えない庭園であって、あの建物の重量感に対抗するには、池の線を強調するために、一抱え或はそれ以上の大きさの石を多数配置する必要があったのだと思う。池の北側（大まかな言い方であるが）に建物が有り、池の南側に樹木の茂みが有ることも、このかなり広い池の明るさを印象づけ、それがまた同時に石を置いた池の汀の線を強調することにもなっているのである。

この庭園の作庭の気風としては、一般に言われる如く豪壮華麗という批評が当たっているだろうが、ただ、今日でこそ広く大衆に開放された庭園になっているが、この庭園は久しい間、徳川將軍の所有物であって、ごく限られた権力者たちだけが鑑賞し得る庭園であったのである。それだからこそ今日まで保存が行き届いたのだと言う事もいえるであろうが、この庭園及び建築物に見られる豪壮華麗の裏面に、かつての支配者階級の権力の誇示という一面が有ったことも見逃すことはできないと思う。

H. 岸和田城址庭園

本稿Bに於て既に述べたことであるが、大阪府岸和田市に在る岸和田城址の庭園は、重森三玲氏の設計と監督とによって昭和28年7着工、11月に完成したようである。

この庭園が作られる迄の経緯について、岸和田市助役の金田健一氏の談話を要約すると、次のような事情であった。この岸和田城の天守閣は文政11年(1828)の冬、落雷によって焼失し、そのままになっていた。昭和5年に岡部氏が城地を岸和田市に寄贈したので、市ではこれを公園として千亀利公園と呼んだ。本丸址には天守閣も無く石垣だけ残っているという状態であったが、前市長の福本太郎氏は、この本丸址を他の目的に使用するために潰してしまう事になるのを憂慮して、庭園を作ることを思い立ち、木の庭では手入れが行き届かなくなると荒廃して復旧できなくなるので、石庭を作ることを企画したのであった。そこで重森三玲氏に依頼して石庭を作ったのであるが、重森氏はここに抽象的に造園して八陣の庭を作られたのである。この石庭を囲む線は日本の古城の地割り(約二千年前の砦の線との由)を造形的に美術化して組み合わせ、石は和歌浦沖の島より陸揚げした水成岩、白砂は京都白川の砂を用いているのである。

金田氏の話は概ね以上のような内容であったが、市立図書館編の『岸和田城の由来、付八陣庭』と、市役所の『岸和田城庭園について』という小冊子の複写を頂戴して、更に作庭を担当された重森氏の意図についても理解することができた。

上記2冊の書から要点を抄出して見ると、この岸和田城址の庭園は、高さ6寸の低い石垣を三段に作り(古城の地割りにもとづく)、平面的鑑賞ばかりでなく上空から(天守閣から)の鑑賞も考慮し、又、四方から鑑賞し得る庭園にしている。石組は諸葛孔明の八陣の法を取り入れ、大将陣は中央に位置し、その周囲を、天陣(4石とも立石)、地陣(3石とも扁平石)、風陣(7石)、雲陣(3石)、竜陣(8石、青竜)、虎陣(9石、白虎)、鳥陣(8石、朱雀)、蛇陣(3石、玄武)、の八陣が囲んでいる。又、天地風雲以下、皆大自然の象徴で、天地の瑞象であるから、蓬萊山の平和の象徴になっている。また砂紋は平和(静海波)を表わしている。石垣の線・白砂の平面・石組・見る者の位置による風景の変化が、この庭園の美を構成しているのである。以上の諸点について述べられている。

さて、天守閣(写真2参照)は昭和29年11月に再建されたものであるから、八陣の庭が完成した時点では、まだ天守閣は無かったのである。しかし、将来、天守閣ができて上から俯瞰されるであろうことも考慮して、この八陣の庭が設計されていた、という事であるから、設計者重森氏はこの庭園を極めて斬新な角度から設計したと言える。

いま岸和田城址の城門をくぐって左へ上ると、上り詰めた所で、パッと眼前に展開するのが、如何にも明るい此の八陣の庭(写真3)なのである。市中の土地より稍々高い場所であるから陽光も燦然と降りそそぐのであろうが、この八陣の庭の明るさは、周囲に樹木の翳りが殆んど無い

上に、白砂と建物や塀の壁の白さとの醸し出す明るさであって、譬えて言えば水の面の輝きにも似た雰囲気を生み出している。作者は白砂に海を象徴させることを試みたようであるが、その意図は成功していると思う。

ここを訪れた者は庭を半周して（写真4参照）石の隠見する変化や、石それぞれの色や形の面白さに注目すべきである。どの方向からでも鑑賞にたえ得る庭園を作者は意図した由であるが、石垣の線の入り組んだ変化が、石庭の単調さに陥る弊を救っている。この石垣の線は、二条城二の丸庭園の池の汀の線ほどには複雑ではないにせよ、直線の交錯による変化と、石垣の線（縁取りの濃い色）の動きによって、石庭全体の力感が強く感じられ、面積の狭い庭ではあるが大將陣や八陣の布石が決して煩わしくなくなっているのである。この事は、天守閣ができて、天守閣の重量感が庭を^上して来るようになった今日、それに対抗する石庭の反発力になっているのである。

天守閣の入り口（写真5参照）を入ると、そこは市の図書館になっているが、最上階から地上を見下すと（写真6参照）、八陣の庭がその全容を現わしている。それは地上で見た時とは異なった石庭の面白さで、石庭という簡素な材料の、余り広くはない庭だけに、しかも樹木の無い平面的な庭だけに、非常に高い所から地上を見下しているような感じになるのである。従って、もし石庭の代りにふつうの樹木の有る立体的な庭園であったならば、池の有無に拘らず、少くとも天守閣からの眺望は極めて狭隘な庭だという感じしか持てなくなると思う。そういう意味で、私はこの石庭は成功していると考えるのである。

さて、それでは重森三玲氏の「八陣」は何に拠っているか、という事になるが、八陣の名称としては、『十八史略』の陳殷の註に挙げているものと同じである。又、石を用いて作庭する所から八陣図への聯想が働いたのだとすれば、それも極めて正統的な八陣図の理解であると言えよう。その布陣の実際に就いては、『図書編』に言うように「敵によって陣を変ずる」のであるから、重森氏の八陣の解釈として認めていいと思うのである。従って孔明の八陣図とこの八陣の庭の抽象的結び付きを認め得るのである。本丸庭園を石庭に造り上げたことは、前記の岸和田市助役の金田氏の談話要旨に有する如く、極めて現実的な要求であったかも知れないが、石庭であったことが本丸庭園としては非常に効果を挙げていると思う。

本丸庭園を城址と結びつけて八陣図にもとづく設計していることも意味の有ることであるが、この庭園が例えば二条城の二の丸庭園と八陣の庭という点で共通していたにせよ、この庭園が市民の為に造られているという目的の故に、二条城二の丸庭園とは異質のものであることは言うまでもない。そして美的見地からしても雄勁な美を持つ現代庭園であると言ってよいだろう。

☆ ☆ ☆

以上、「八陣」と「八陣の庭」とについて私見を開陳した。「八陣」には戦術とか陣地構築法とか種々の内容が考えられるが、やはり臨機応変の軍団配備の戦術としての性格が強いこと、「八陣図」は諸葛孔明が石を材料として作った軍団配備の模型であろうということ、又、八陣及び八

陣図に易の思想との関聯が感じられること等を、従来行われている諸説を参考にして考えて見た。

更に「八陣の庭」については、一部で謂われている京都二条城の八陣の庭（二之丸庭園）は、実地に調査した結果として、作庭の意図に果して八陣の庭という計画が有ったかどうか、なお疑問に思われたこと、又、岸和田市の城址庭園の八陣の庭は、作庭者の意図が十分に果されているもので、現代庭園としてその価値が高いことを、これも実地調査の結果として述べて見たのであった。

本稿執筆の動機は、緒言に述べた如く、故丹羽鼎三博士の「八陣の庭」と題する論稿を拝見して興味を覚えたということなのである。論述の方法も丹羽博士の論述に倣っている。本稿執筆に当って参考にした書物の書名は総て文中に掲げてある。短時日の執筆で粗漏も多いと思われるし、もとより未熟な論稿であるから、先学諸賢の御叱正と御教示とを頂ければ幸甚である。

（昭和辛亥歳仲夏月下澣識）

【附記】 本稿執筆に際して、資料複写をして頂いた岸和田市役所と明大の長谷川昭彦教授、調査に協力して下さった岸和田市助役金田健一氏、同市史編纂室の須藤定雄氏、茨木市の五十嵐珪子夫人、漢文の解説について助言して頂いた東海大学講師の施清香氏、淡江文理学院大学教授の王久烈氏、以上の諸氏に対して感謝の意を表したい。